

京都府立医科大学の「今と未来」を伝える広報誌

The KPUM TIMES

COMMUNICATION MAGAZINE

Renewed

vol.03

September 2025



地域と歩む医学の英知

- 特集1 | 広小路キャンパス活性化プロジェクト
- 特集2 | 実習で育つ未来のプロフェッショナル
- 特集3 | 第1回世界長寿サミット開催



京都府立大学法人
京都府立医科大学
KYOTO PREFECTURAL UNIVERSITY OF MEDICINE



附属図書館1階

2025年、附属図書館内に整備されたラーニング commons 「Koto Square」。フレキシブルでオープンなこちらのスペースは、グループワーク、個別学習、分科会や交流会、リラックスタイムなど、様々な場面で活躍しています。

(cf.特集1|広小路キャンパス活性化プロジェクト)

CONTENTS

03 学長挨拶

04 特集1
広小路キャンパス活性化プロジェクト

06 特集2
実習で育つ未来のプロフェッショナル

医学科 早期体験実習

看護学科 臨地実習

医学科 NCLICK(長期統合型臨床実習)

08 特集3
第1回世界長寿サミット開催

09 Topic 1 研究紹介

10 Topic 2 産学公連携

Topic 3 看護

11 Topic 4 地域

Topic 5 国際

News 創立150周年記念事業

12 新任教授紹介

細胞生物学 吉澤 達也 教授

脳神経内科学 尾原 知行 教授

臨床病理学 小嶋 基寛 教授

細胞分子機能病理学 原田 義規 教授

14 分子病態病理学 宮川 文 教授

母性看護学・助産学領域 高橋 由紀 教授

皮膚科学 福本 毅 教授

医療レギュラトリーサイエンス学 中島 宣雅 教授

16 大学、附属病院からのお知らせ

学長挨拶

学長を拝命して3年目になりました。
この間の大学の動きを振り返ります。

京都府立医科大学学長
夜久 均



【大学運営理念】

学長の所信の中で、大学の理念「世界トップレベルの医学を地域へ」に基づいた運営理念として、目指すべき二つの大学像を示しています。①医学の分野で世界に伍する研究大学、②大学のステークホルダーの期待に応える地域の拠点大学です。公立大学の使命として地域課題の解決への努力は必須ですが、それを遂行するためには世界に伍する研究力が必要です。これらの取り組みにより社会からの信頼を得、ブランド力の向上を図ります。

【医学教育改革】

学修者本位の教育を目標に、学生が何を身に付けたかを評価していく中で、内部質保証に係るPDCAサイクルを回すべく、新たに学生代表、他学の医学教育専門家を含めたプログラム委員会、プログラム評価委員会が立ち上がりました。2024年度には大学機関別認証評価を受審し、承認を得ることができました。

【研究力向上】

「高等教育の在り方に関する特別部会」の最終答申で、高等教育機関、地方公共団体、産業界が連携し、研究成果の社会実装を通じた社会貢献の重要性が謳われています。本学では2024年に産学公連携機構(K-MICS)を立ち上げ、島津製作所、堀場製作所と包括連携協定を結びました。K-MICSの活動が研究成果の社会実装を強化・加速し、社会貢献に寄与すると考

えています。

【附属病院の変革】

2024年4月に、京都府より救命救急センターの指定を受けました。指定を受けた直後から応需率99%で対応し、救急搬送件数が一気に3倍となりました。2025年6月末には救命救急センター病床整備が終了し、より効率的な救急対応が可能かと思えます。

【大学を取り巻くその他の動向】

1) ドナルド・マクドナルド・ハウス 京都(京都ハウス)

京都ハウスは、河原町今出川に建設予定の、病気で入院している子どものご家族が安価で宿泊できる施設です。2024年2月に募金委員会が立ち上がり、約1年を経て目標額に達しました。現在、設計段階にあり、2026年度末の竣工を目標としています。

2) ラーニングコモンズ(Koto Square)

学生が小グループでアクティブラーニングを行う非常に自由度の高い空間が附属図書館にできました。100人規模の研究会、また飲食を伴う懇親会も可能です。この空間が、他施設も含めた学生や研究者にとって異文化交流の場となればと思っています。

京都府立医科大学が引き続き成長できますよう、皆様のご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

特集1 | 広小路キャンパス活性化プロジェクト



未来へ響け、「学びと交流」の音色

ラーニングcommons「Koto Square」誕生



2025年4月、「広小路キャンパス活性化プロジェクト」の一環として、京都府立医科大学附属図書館の1階に新たな学びと交流の拠点、ラーニングcommons「Koto Square」がオープンしました。広さ635㎡・約220席の開放的な空間には、グループ学習や個人学習、気軽なミーティング、さらには休憩や憩いの時間にまで対応する、柔軟で多機能な4つのゾーンが設けられています。木の温もりが心地よいテーブルと椅子には京都府産木材を使用。「Koto(コト)」という名前には、京都の“古都”、知識をつなぐ“言”、

実践する“事”、そして人と人との響き合いを象徴する“琴”という4つの意味が込められています。

「Koto Square」は、単なる“学びの場”にとどまりません。学生、教職員、地域の医療関係者が交流し、新しい知と人の“つながりを生む広場”です。



◆ 4つのエリアで生まれる多様な学びと出会い



アクティブエリア

大型スクリーンやホワイトボードを備えたディスカッション空間。発表準備やイベント開催に最適です。



ブレイクエリア

ファミレス風の席やハイカウンターで語らいつながら学ぶ空間。気軽なグループ利用にも好評です。



リラックスエリア

ビーズクッションやソファ席で休憩しながら、新たな発想が芽生える空間。



ソロエリア

一人ひとりに配慮した半個室ブースや広めのチェアで、集中力を引き出す学習空間。

◆クラウドファンディングご支援への心よりの感謝

この「Koto Square」は、皆さまからの温かいご支援によって誕生しました。2025年1月から実施したクラウドファンディングには、総額14,411,320円ものご支援を賜りました。心より御礼申し上げます。「学生たちに、自分たちで学びを切り開ける空間を届けたい」その願いを胸に、準備を重ね、ようやく形にすることができました。ご支援は、自由にレイアウトできる可動式テーブルと椅子、学びを支えるICT機器、京都産木材の内装など、空間のすみずみに活用されています。

【ご支援の成果(一部抜粋)】

- 自由にレイアウトできる可動式テーブルと椅子
- 音声にも配慮された半個室ブース
- ポスター発表や共同研究に最適なホワイトボードやスクリーン
- 食事のできる交流スペースの整備

この空間で交わされる声、創造される発想こそが、皆さまのご支援の結晶です。



◆「自分たちの学びのカタチ」を見つける場所

実際の活用例も多岐に渡ります。学生たちはレポート課題に取り組んだり、グループ発表の準備をしたり。Yogiboにくつろぎながらの読書やダイナー席でランチを取る姿も見受けられます。教職員は、打ち合わせやランチョンミーティング、授業内のディスカッションにも活用しています。夏休みには、高校生にも開放し、医科大学の雰囲気を体感してもらいました。

◆「学び」が生まれ、「つながり」が育つ場所へ

「Koto Square」は、ただの施設ではありません。ここには、学生たちが自由に、そして前向きに学びを楽しむ姿があります。医療を志す若者たちが、教職員や地域の医療従事者等と互いに語り合い、支え合うことで、**未来の医療のかたち**をここから育んでいます。

「食事ができて、周囲を気にせず発言できる場所ができて嬉しい」
「開放的な雰囲気で、気分に合わせて使う場所を選べるのがありがたい」

—— 学生たちの声が、
Koto Squareの価値を何よりも物語っています。



クラウドファンディングというカタチで皆様にご支援いただき、そして実際にこの場を活用してくださる皆様によって、このプロジェクトは「始まり」から「実り」へと変わっていきました。今後も図書館では、さらなる発展を目指して、イベントやサービスの充実を図ってまいります。ぜひ、あなたの一步を「Koto Square」に。お待ちしております。

著名人を迎える特別講演会、続々開催！

附属図書館では、知と文化の発信拠点として、府民向けの特別講演会を定期的に開催しています。10月2日には、**ミステリー作家・貫井徳郎氏**をお招きします。代表作『愚行録』『乱反射』、そして最新刊『不等辺五角形』などを題材に、創作の裏側や“物語を生み出す技術”について語っていただきます。

これまでも、建築家・安藤忠雄氏、コラムニスト・泉麻人氏、直木賞作家・北村薫氏、翻訳家・松岡和子氏、ピリギャルの小林さやか氏、落語家の春風亭一之輔氏や三遊亭楽生氏など、幅広い分野から錚々たるゲストをお迎えしてきました。

医学の枠を超えて、文化や言葉、人の生き方にふれる時間——
それもまた、豊かな学びの一部です。



新たな取組

日曜開館スタート！

2025年6月より、附属図書館は**日曜も開館**しています。

学生・教職員の皆様からの声に応え、「Koto Square」をより活用いただけるようになりました。

- 日曜：10:00～18:00 ※平日・土曜の開館時間に変更はありません。
平日：9:00～21:00 (★学内者対象 第3閲覧室のみ 23:00まで)
土曜：10:00～18:00 (★学内者対象 第3閲覧室のみ 23:00まで)
・休館日：祝、年末年始 (12/28-翌年1/4)

「ちょっとだけ自習したい」
「静かな場所で考えをまとめたい」
そんな時にも、ぜひ気軽にお越しください。



関連リンク

・ラーニングコモンズ「Koto Square」
紹介ページ



<https://www.kpu-m.ac.jp/k/library/riyou/kotosquare.html>

・図書館ウェブサイト



<https://www.kpu-m.ac.jp/k/library/>

・広小路キャンパス活性化
プロジェクト「京都広小路通信」



<https://hirokojijp.kpu-m.ac.jp/>

ご支援・ご協力をお願い

今後も附属図書館が、地域とつながる「開かれた学びの場」として発展していくために、以下の方法での継続的なご支援をよろしくお願いいたします。オリジナルブックカバーや手ぬぐいなど様々な返礼品を用意しております。

- ・寄附金による支援：<https://www.kpu-m.ac.jp/k/library/sougouannai/kifu1803/kifu.html>
- ・SNS等での情報拡散



京都府立医科大学 附属図書館一同

特集2 | 実習で育つ未来のプロフェッショナル

専門性と人間性を育む実習

本学では、未来の医療を担う学生たちが、現場での実習を通して専門性と人間性を育んでいます。
 本特集では、医学科の「**早期体験実習**」、「**NCLICK(長期統合型臨床実習)**」、看護学科の「**臨地実習**」という3つの実習について、担当教員による解説と、学生自身の言葉で語られる体験を併せて紹介します。

医学科

早期体験実習

早期体験実習とは

医学部1年生から3年生程度の低学年次の学生が、実際に医療の現場を体験することにより、医学生としての自覚をもち、医師への動機づけを目的とした臨床医学実習の1つです。

本学では1年次の6月に、附属病院の薬剤部・栄養課・放射線技術課・臨床検査技術課・リハビリテーション部のスタッフや看護師、研修医の業務の一端を経験・見学し、多職種の業務を知りチーム医療への理解を深める体験型プログラムを行っており、2025年度も各部署の皆様にお世話になり無事終了しております。



教育センター
助教 間嶋 紗織

早期体験実習で学んだこと



医学科1年生
山本 真央(やまもと まお)さん

実習では、救急科と薬剤部の現場に触れました。救急の現場では、痙攣発作の患者さんに対し、医師と看護師が冷静かつ迅速に連携して対応する姿から、緊迫した状況下での判断力と多職種連携の重要性を実感しました。薬剤部では、調剤や薬の粉碎、服薬指導などが行われており、こうした作業が患者さん一人ひとりに合わせたきめ細やかな医療の提供につながっていることを知り、感銘を受けました。

今回の実習を通じて、医療現場では多様な専門職が互いに補完し合い、患者中心の医療が成り立っていることがわかりました。自らもその一員として責任ある役割を果たし、協調性を持って貢献できる医療人を目指したいと強く感じています。

早期体験実習で学んだこと



医学科1年生
加地 春樹(かじ はるき)さん

私はICUで働く看護師さんの対応が心に残っています。挿管が必要な患者さんの治療では、医師は検査し議論してはデスクに戻っていくのに対して、看護師さんは患者さんにつきっきりで寄り添う姿が印象的でした。

治療方法を考える立場で責任が重い医師も大変ですが、体位変換などの体力が必要な仕事や、清拭や着替えなどの配慮が必要な仕事など、看護師さんもまた大変だと実感しました。また、投薬の量や種類を考えるのは医師ですが、実際の投薬は看護師が行うことが多いことも教えていただきました。その際の「看護師が困っている時に助けにいける医師になってほしい」という言葉は今も鮮明に覚えています。

看護師の方への感謝を忘れず、協力しあえる医師を目指したいです。

看護の臨地実習とは

育まれるのは、子どもの笑顔と、寄り添う思いのゆるぎなさ

小児看護学実習では、子どもと家族のかけがえのない日々に関わりながら、学生はこれまで自分の中で育んできた“看護”と向き合い、問い直す経験を重ねていきます。

当実習では、独自に設計されたVR教材(Virtual Reality)や動画教材、OSCE(客観的臨床能力試験)、最新のシミュレーターによる技術定着などを臨地実習と連動して展開することで、学生のリアルな経験を知識や技術とつなげていく支援をしています。

また、学生一人ひとりの学びと成長のプロセスを重視し、ルーブリック評価に基づいた個別面談の機会を複数設けています。これによって日々の関わりや気づきを学生自らの言葉で丁寧に見つめ、子どもへ“寄り添う思い”をじっくりと育んでいきます。



小児看護学領域
助教 中口 尚始

看護の臨地実習で学んだこと



看護学科4年生
平井 三貴(ひらい みき)さん

私は全領域の実習の中で、小児看護学実習が最も印象に残りました。

私が受け持たせていただいた患児は、病状が悪化してしまい、その際母親は涙を流すほど精神的に大きなショックを受けておられました。そこで私は少しでも力になりたいと思い、不安を傾聴し共感的に関わると、「聞いてもらえて嬉しかった」と感謝の言葉をいただき、私自身も少しでも精神的な支えとなれたことをうれしく感じました。子どもを思う母親の深い愛情に触れると同時に、ご家族の負担の大きさを改めて実感し、この経験から、患者本人はもちろんのこと、ご家族の思いや背景にも目を向け、寄り添ったケアを提供することの重要性を学びました。

今後も患者やご家族を多角的に捉え、最も適したケアを考え続けていく姿勢を大切にしていきたいです。

NCLICKとは

長期統合型臨床実習「North Campus Longitudinal Integrated Clerkship in Kyoto(通称NCLICK(エヌクリック))」は、通常の1か月毎の臨床実習とは異なり、当院に4ヶ月間切れ目なく滞在し、診療科の垣根を越えて、患者さんの初療から退院後の生活まで、より実践的かつ継続的に学ぶことができるプログラムです。

長期間滞在することで、病院外も含むさまざまな地元との関わりを通じて、地域医療をより幅広く学ぶことができます。全国的にもこれほど長期で多彩な内容を盛り込んだ臨床実習は、他に類をみないかもしれません。



京都府総合医療・地域医療学講座
准教授 丹羽 文俊

NCLICKで学んだこと



医学科6年生
杉本 亞梨朱(すぎもと ありす)さん

NCLICK全体を通して感じたことは、人と人との繋がりが患者さんの安心感にも繋がるということです。丹後地域では病院や医師の数が比較的少ない分、連携がより密な印象を受けました。かかりつけ医と入院主治医、さらには訪問看護や薬局などの多職種の方々が、顔の見える関係で連絡を取り合って地域医療に取り組まれている姿を目の当たりにしました。また「患者さんの価値観を知る」ことの大切さにも気付かされました。

NCLICKでは丹後地域で実際に暮らし、地元の方々の温かさにも触れることができ、丹後地域が大好きになりました。この経験を通じ、将来は京都府北部で、患者さんを全人的に診られる医師として地域医療に貢献できるよう努力したいという決意が強くなりました。

特集3 | 第1回世界長寿サミット開催

グローバルな高齢化と 健康長寿への挑戦

世界中の高齢化社会は、健康長寿の促進において多くの課題に直面しています。そのような中、2025年6月16日～19日、京都府京丹後文化会館にて、外務省の後援を得て、第1回世界長寿サミット(<https://glm-p.com/wls2025/index.html>)が開催されました。同サミットでは、第一線の専門家が集まり、老化生物学、生活習慣医学、地域密着型健康戦略の最近の進歩について議論されました。また、同サミット内で開催された市民公開講座では百寿者率が日本平均の約3倍の京丹後地域(京丹後市、宮津市、与謝野町、伊根町)の京丹後長寿コホート研究の成果が、約300名集まった市民に日本語で披露されました。

特に注目されたのは、エピジェネティック時計による加齢の測定、細胞の老化に関与するオートファジー(損傷した細胞成分をリサイクルする機能)、腸内細菌と健康長寿の関係です。アメリカUCLAのステイブ・ホバース博士は、DNAメチル化の変化をもとに生物学的年齢を予測する技術を紹介し、特定の生活習慣や食事が老化速度に影響を与えることを示しました。また、大阪大学の吉森保教授は、オートファジーが老化や病気の予防に重要であるとし、その促進によって寿命延伸が可能であると述べました。香港中文大学のチャン教授は、腸内細菌のバランスが免疫や認知機能、代謝に深く関係しており、特定の菌や代謝物(酪酸、スベルミジンなど)が健康寿命を延ばす鍵になると説明しました。さらに、母親の健康状態や乳児期の環境が子どもの腸内環境に影響し、将来の疾患リスクを左右することも明らかにしました。

また、三菱総合研究所の松田智生氏は、「プラチナ



社会」という概念を紹介しました。高齢者を社会の担い手と位置づけ、地域活動や教育の場での参加が健康にもつながると提案しました。イタリアのバンディーニ教授は、地方の高齢化対策として、デジタル技術や地理情報を活用し、医療や交通の課題を可視化して解決する取り組みを紹介しました。

最後に、サミットは、大会長の夜久均学長により(1)絆を育み、コミュニケーションを持続させること、(2)植物性タンパク質や食物繊維を豊富に含む食事を楽しむこと、(3)規則正しい日常生活や身体活動を日常生活に取り入れること、(4)生きがいを大切にすることという4つの柱を掲げた共同宣言で締めくくられました。

このサミットは、科学と文化、地域の知恵を融合させることで、世界中の誰もが健康で尊厳ある長寿を享受できる未来を目指す「行動の始まり」として位置づけられています。

京丹後市、本学をはじめとする多くの方の協力を得て、世界10か国(メッセージを含めると12か国)から研究者が参加し、550名が集う盛会となりました。報道各社にも取り上げられ、大変成功裡に終えることができましたこと、心より感謝申し上げます。



サミット関係者の集合写真



基礎研究

咳と嚥下のスイッチ 喉に新たな感覚器官を発見

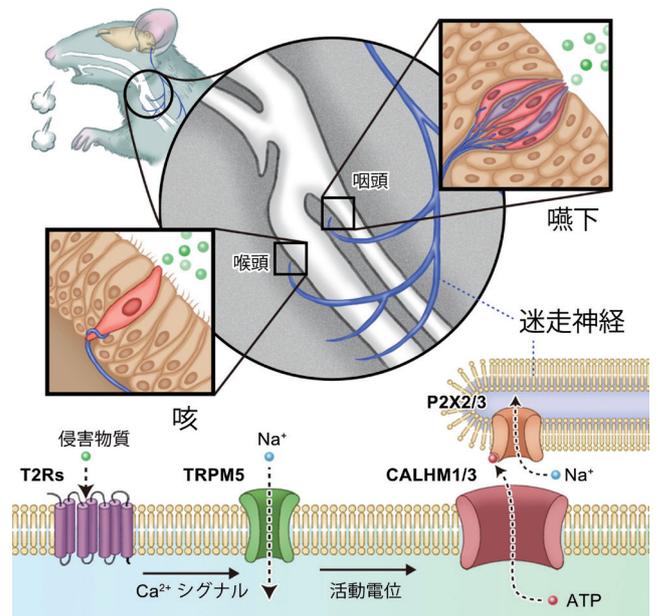
～咳治療に道筋、喉ごし感覚の一端か?～

咳が8週間以上続く慢性咳嗽や嚥下障害には原因不明または難治症例が多く治療法が限られています。こうした現状から咳や嚥下の生理学的機序の理解不足が指摘されてきました。本研究では、マウスを用いた実験で、喉の上皮に希少に存在する感覚細胞群を発見しました。さらに、これらの細胞が侵害化学物質に応答し、喉頭では咳、咽頭では嚥下を引き起こすこと、およびその細胞内分子メカニズムを解明しました。

本研究成果は、咳や嚥下を司る新規感覚器官の発見であり、苦味を呈する毒素を含む植物抽出物、タバコの煙、空気汚染物質、病原体関連物質など多様な侵害化学物質に対して生じるこれらの気道防御反射の機序が明らかとなりました。さらに、これら感覚器官がアレルギー性咳過敏症にも関与していることが分かり、慢性咳嗽創薬に道筋を示すことが期待されます。

また、一般に喉ごしと表現され、ビールを飲む際に喉で知覚される感覚には苦味が重要ですが、その機序は分かっていません。苦味物質が嚥下を促進する機序を解明した本研究は、ビールの苦味もつ喉ごし感覚の一端を説明するかもしれません。

(Cell 188(10):2687-2704, 2025)



明らかとなった咳と嚥下を引き起こす細胞分子機構。
赤色で描いた細胞が今回発見した細胞。

基礎研究

腫瘍の低酸素領域をMRIで描出し、
放射線治療の効果も高めるセラノスティクス製剤を開発

悪性腫瘍の低酸素領域は悪性度や治療抵抗性に関わっており、実際、最も予後が悪いがんの一つとされる膠芽腫は低酸素領域が豊富です。悪性腫瘍の低酸素領域を視覚的に評価できることは臨床上有用ですが、核医学分野で臨床試験が行われているものの、解像度や施行できる施設が限られるといった問題があります。また、放射線治療も低酸素領域に対しては効果が乏しく、低酸素領域への有効な放射線治療法が確立されていないのが現状です。

我々は、低酸素領域に集積し、かつ放射線治療効果を高める働きがある「2-ニトロイミダゾール誘導体」に着目し、すでにMRIの分野で陰性の造影剤として用いられている酸化鉄と結合させたナノ粒子製剤を作成することで、問題を解決できないか研究を進めました。鉄は生体で最も安全な重金属であり、ナノ粒子には腫瘍への良好な集積が期待されています。我々の合成した「SPION-PG-NI」は、膠芽腫の担癌マウスに対してMRIで低酸素領域を描出し、放射線治療効果を高めることを証明しました。これは、鉄をコアとした物質としては、世界で初めての報告であり、膠芽腫モデルでも初めての報告です。

なお、本研究は、第54回日本神経放射線学会で銀賞を受賞し、本研究をまとめた論文はACS nanoに掲載され、supplementary

cover artに選出されました (ACS Nano. 2025 Apr 8;19(13):12762-12776.)。また、本論文は2025年8月30日に第10回国際磁気共鳴医学会・日本チャプター学術集会にて小川誠二賞を受賞しました。将来的には臨床研究にも繋げていきたいと考えています。



Topic 2

産学公連携

産学公連携で未来を拓く：K-MICSの活動と挑戦

イノベティブな研究人材の育成と持続可能な研究・臨床環境の整備、さらにその成果を社会に実装するための産学公連携プラットフォームとして2024年4月に設立したK-MICSの主な活動を紹介します。



島津製作所・堀場製作所との初の包括連携協定の締結

京都創業のグローバル企業である島津製作所及び堀場製作所の2社と、K-MICS初となる包括連携協定を締結し2025年1月に記者会見を行いました。

その後、協定に基づき、連携事業のひとつとして研究開発提案コンペティションを実施し、2社からも審査委員が出席し、研究テーマ4件を採択しました。採択研究は2025年4月から研究をスタートしています。

本コンペを通じて、大学の知と企業の力が融合し、社会に貢献するイノベーションが生まれることが期待されます。



「覚生塾」における人材育成

「覚生塾」は現在と未来に活躍できる研究人材の育成や学内外・異分野・異業種を含めた人材交流等を目的に運営しております。2024年12月には京都工芸繊維大学と連携し、医工連携WG「アイデアピッチ&交流会」を開催し、同大学及び企業関係者の方々約100名に参加いただきました。同会において、大阪大学特任教授(当時)高岡裕美先生による「研究成果を活かすための知財戦略」についての講座も実施しました。

さらに、2025年6月には「研究推進に必要なことを「知る・考える・実践する」ために」がテーマのプログラムを企画し、京都府の医療・薬事関係各位にも講義をいただき、多くの参加者のもとで活発で熱量の高い議論が行われました。

今後も参加者の要望も取り入れながら、充実したプログラムを企画し、実施してまいります。



Topic 3

看護

キャリアセンターの現状、今後の展望

看護実践キャリア開発センターでは、社会のニーズに対応する看護実践能力向上を目指した教育支援、看護師の生涯を通じたキャリア形成支援のために、地域に開かれた教育プログラムの開発、教育指導者の養成、教育環境の充実を図り、看護職の人材育成に寄与することを目的とし、様々な教育プログラムや事業を展開しています。

年に一度開催される「看護倫理ベーシック研修」や「看護職キャリア交流会」、年間4回コースの「看護研究支援研修」、本学附属病院看護師を対象とする「臨地実習指導に携わる看護師のための支援研修」、看護学科生を対象とする「看護学科キャリア教育」、本学附属病院の認定看護師、専門看護師が専門領域の最新知識をオンデマンドで配信する「看護専門分野別講座」などがあります。

特定行為研修やProject KPUM(文部科学省「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」)など、重症患者に対応できる看護師養成を目指す事業も運営しています。

しかし、どこの医療機関も人員不足であり、受講生の確保が大きな課題です。広報の手段や参加可能な研修方法を検討し、意欲のある看護職が学び続けることのできる研修のあり方を模索しています。



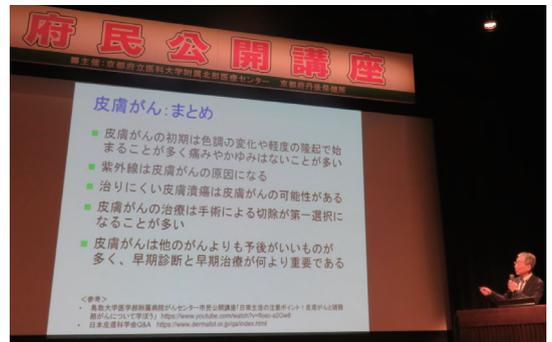
Topic 4

地域

公開講座・健康セミナー

本学では、広く府民に開かれた大学として、医学的研究により得られた成果を公表する場として「公開講座」を開催することにより、生涯学習の場の提供や、府民の健康増進及び福祉向上に貢献しています。例年、各診療科や看護などの様々な観点から、複数の先生方にご講演いただいています。2025年度は「救命救急医療」をテーマに、11月30日(日)に図書館ホールで開催予定です。

また、本学主催の公開講座のほか、教室や附属施設等が開催する「府民公開講座」や、府内市町村等が開催する講座等への出張講演(「健康セミナー」)も実施しています。2025年7月6日(日)には、府民公開講座2件「大腸癌の予防・検診・内視鏡を知ろう」、「最新技術で挑むがん治療」が開催され、それぞれ40名程度、80名程度の方にご参加いただきました。



Topic 5

国際

国際対応力を育む海外研修支援制度

外国人患者の受け入れ強化や地域医療の高度化を目指し、本学附属病院の医療技術職員を対象に、海外研修を支援する制度として「医療従事者海外研修等支援事業」を実施しています。

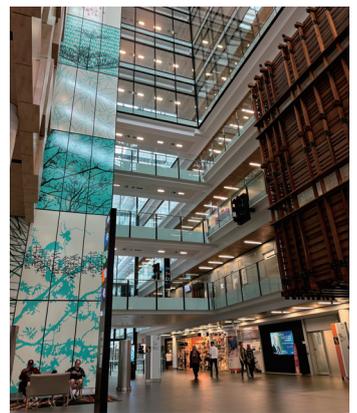
利用者の声

2024年8月、ゴールドコースト大学病院にて、臨床栄養士業務・フードサービス業務の研修を受けました。現地では、管理栄養士が経口・経腸・静脈栄養の計画から処方・投与指示、必要に応じた血液検査オーダーまで担い、医療チームの一員として高度な専門性を発揮していました。

病院食は、患者がタッチパネルで自由に内容や分量を選べるシステムで、糖尿病患者も指導を受けた上で自ら選択するため、特別食は不要とのこと。フードロスの削減にも繋がっていました。さらに、多様な宗教・文化に配慮した食事提供体制も整っており、大変学びの多い機会となりました。

今回の経験を今後の業務に活かしてまいります。貴重な機会を賜り、関係者の皆様に感謝申し上げます。

栄養管理部 栄養課 浦出 華



▲ゴールドコースト大学病院(ロビー)



(左)PES(患者エンターテインメントサービス)という、ベッドサイドのタッチパネルです。食事選択だけでなくTV、教育ビデオ、ラジオなどを使用可能です。(中)食事選択画面です。今後はルームサービス制(24時間、数あるメニューからオーダー可能)を導入予定とのことでした。(右)管理栄養士とアシスタントのみなさんと

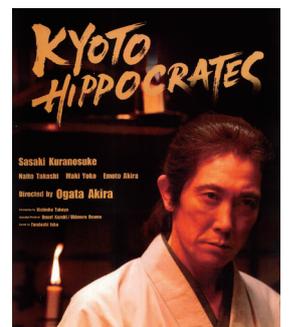
News

創立150周年記念事業

映画制作～今秋本学関係者試写会・来春ロードショーを予定～

本学が2022年に創立150周年を迎えたことを記念して、創立当時の建学の精神・志を現在に受け継ぐ本学の歩みや医療教育への思いを描いた映画「幕末ヒポクラテスたち」を制作中です。

今秋トリアス祭を機会に本学関係者対象の試写会を予定し、一般公開(全国ロードショー)は来春ごろを予定しておりますので、ご期待ください。



新任教授紹介



大学院医学研究科 細胞生物学

吉澤 達也 Tatsuya Yoshizawa

略歴

東京大学大学院農学生命科学研究科修了(博士(農学))後、新潟大学歯学部・助手、コロンビア大学遺伝発生物学部門・ポスドク研究員、熊本大学大学院生命科学研究部・助教、講師、准教授を経て、2024年4月より現職。

座右の銘

釣れないときは、魚が考える時間を与えてくれたと思えばいい

生物学は医師が一生付き合っていく学問であるにも関わらず、受験に不利という理由で高校生の生物離れが加速しています。医学部に入学して生物学を学ぶが理解が追いつかない学生が激増している現状は危機的であり、何とか生物学に興味を持ち、科学的な思考力を養えるように日々全力で取り組んでいます。

骨関連疾患は代謝系疾患・心血管系疾患・認知症・寿命などと相関することから、骨は生命活動を根底から支える非常に重要な臓器です。当研究室は、運動器(骨と骨格筋)自身の量や質を保つ新しい分子機構や、運動器から産生される新規ホルモンの役割を解明し、運動器を基盤とした様々な疾患の予防・治療法開発のシーズとなることを目指しています。

どんなに真剣に時間をかけて努力しても、成果につながらないこともあります。その時は座右の銘のように、無駄なこと何一つない、この経験が未来を作るのだと考え、次にチャレンジするメンタリティーは、基礎研究者にも医師にも必要なのではないかと思います。日々の教育研究活動において、若い方が現実を理解しながらも理想を追うバランス感を養え、成長できる環境を整えていくことが私の使命だと思っています。



大学院医学研究科 脳神経内科学

尾原 知行 Tomoyuki Ohara

略歴

京都府立医科大学卒業後、京都市内の急性期病院、国立循環器病研究センターなどで勤務。2014年本学に教員として赴任、2018年カルガリー大学臨床神経科学脳卒中部門に留学、2024年12月より現職。

座右の銘

知行合一

2024年12月より脳神経内科学教室の第4代教授に就任いたしました。これまで急性期脳卒中診療と脳卒中の臨床研究に携わってきた経験を活かし、大学病院のみならず京都府全体における脳卒中医療のさらなる充実と発展に貢献したいと考えており、身の引き締まる思いです。

脳神経内科は、かつては一般の方々、さらには医療関係者の間でも認知度が低い診療科でしたが、2018年に学会をあげて「神経内科」から「脳神経内科」へと名称変更し、近年は神経難病に加えて、脳卒中、認知症、頭痛、てんかんといったcommon diseaseを幅広く担う診療科として、ようやく社会的認知が高まりつつあります。

今後は京都における神経疾患診療と研究の一層の発展に尽力するとともに、臨床力に加え患者さんに寄り添える医師を育成し、地域社会に貢献できる教室運営を目指してまいります。

座右の銘は、私の名前の由来にもなった「知行合一」。実践に根ざした学びを通じて人間力を高め続ける姿勢を大切にしながら、今後も精進してまいります。

どうぞよろしくご指導のほどお願い申し上げます。



大学院医学研究科 臨床病理学

小嶋 基寛 Motohiro Kojima

略歴

昭和医科大学医学部卒業後、同大学院医学研究科 第一病理学教室にて博士号を取得。その後、Kiel University 病理学教室を経て、国立がん研究センター・先端医療開発センターユニット長を経て、2025年1月より現職。受賞歴として、日本病理学会学術奨励賞(A)、大腸癌研究会優秀論文賞などを受賞。

座右の銘

普遍的なものへの崇敬

2025年1月から臨床病理学教室に赴任いたしました。生まれて初めての関西での勤務と、久しぶりの単身赴任。少し寂しいけれど、いずれも楽しんでおります。東国の諸先輩方からは、「ぶぶ漬け」まがいの逸話を多数聞いてまいりましたが、こちらに来てすっかり太ったお腹をさすりながら、自分の恵まれている人間関係にも感謝いたしております。

臨床病理学教室は、比較的新しい診療科の一つである、病院病理部/病理診断科を運営し、臨床に近い領域を開拓してまいります。それでも我々の担う業務範囲は膨大で、検査室の標準的な環境整備から、新しい検査法の導入に加えて、日々の病理診断(観察)に基づいた研究もあります。

我々は、ISOで推奨されている標準的な質の高い病理検査を可能とし、ゲノムを含めた新しい検査の有用性を明らかにし、実装化してまいります。また、Frischがみつばちダンスを発見したように、ヒトの病気を観察することから分かることも未だに沢山あります。病理観察及び診療は、病気という普遍的なものに対する我々の祈りでもあります。臨床病理学部門は若い人材に富んでおり、多彩な人材が育ってくれるよう、試行錯誤する毎日です。



大学院医学研究科 細胞分子機能病理学

原田 義規 Yoshinori Harada

略歴

京都府立医科大学卒業後、消化器内科医として勤務。カルガリー大学への留学等を経て、2004年より本学細胞分子機能病理学教室の教員を務める。2025年4月より現職。

座右の銘

道は拓く、歩む者に

2003年に旧第二病理学教室から名称を変更した細胞分子機能病理学は、他の2つの病理学部門と強固な連携を保ちながら、教育・研究・病理業務に取り組んできました。

病理学は、病気の「理(ことわり)」を追究する学問です。私たちの教室では、ラマン分光をはじめとした最先端の光学技術を駆使し、生きた細胞や組織の中で分子がどのようにふるまい、疾患がどのように始まり進行するかを可視化し、統合的に理解する研究を行っています。医学・生物学にとどまらず、光学や物理といった異分野の研究者との連携により得られる新たな発想と技術の融合が、病態解明や診断法開発の原動力となっています。

私たちは、粘り強く積み重ねた努力が未来を切り拓くと信じ、日々研究に取り組んでいます。これからも、進化し続ける医学の中で問い続け、学び続ける姿勢を大切にしながら、次世代を担う人材の育成にも力を注いでまいります。本学が長年にわたって培ってきた知と人のつながりを大切に、未来を担う若い力とともに、医学の可能性を広げていく一助となれば幸いです。

「見えないものを見る」—その病理学の本質を胸に、これからも地道に、そして情熱をもって取り組んでまいります。

新任教授紹介



大学院医学研究科 分子病態病理学

宮川 文 Aya Miyagawa

略歴

京都府立医科大学卒業、医学博士(京都大学)。米国マサチューセッツ総合病院への留学や京都大学附属病院・京都大学医学研究科教員、関西医科大学教員等を経て、2025年4月より現職。

座右の銘

この道より我を生かす道なし、
この道を歩く

病理学は、生理的状态から逸脱した臓器、組織、細胞の形態学的変化を精密に観察記述することを出発点とし、病理(ことわり)を探究するかつては医学の幹となる学問体系でした。19-20世紀は病理学の曲がり角で、「病気の形態学」から分子免疫学、細胞生物学などの進展に伴い、これらと混然一体になって、真の病気の生物学に繋がり現代医学に飛躍的な発展がもたらされました。形態学に立脚した病理学は研究手法の非常な進歩に伴って広い裾野をもつ医学分野になったように思います。

私は本学卒業以来ほとんどの期間を学外で研鑽を積んできました。このたび本学病理学の1部門を率いていく機会をいただき光栄に思います。この変化の激しい時代に、これまで培ってきた病理学全般および移植免疫の知識を根幹に据えながらも教員、共同研究者の力も借り積極的に新しい手法・考え方を取り入れていきます。臨床病理と基礎病理学は車の両輪の関係にあり、臨床病理の発展にはそれを裏付ける基礎的研究が不可欠です。両者を融合させ炎症性疾患の病態に迫り、疾患特異的分子の探索から治療法導出へつなげていきます。本学の病理学の発展に寄与できるよう努めてまいります。



大学院保健看護学研究科 母性看護学・助産学領域

高橋 由紀 Yuki Takahashi

略歴

北里大学看護学部、名古屋大学医療技術短期大学部専攻科卒業後、助産師として勤務。名古屋大学大学院医学系研究科にて博士号(看護学)取得。スウェーデン王立農業科学大学、カロリンスカ医科学研究所にてポストドク研究員。日本赤十字豊田看護大学講師、名古屋大学大学院医学系研究科准教授を経て、2025年4月より現職。

座右の銘

自主自律

私は、2025年4月に看護学科母性看護学・助産学分野の教授を拝命いたしました。本学の助産師教育の歴史は長く、1889年(明治22年)京都府医学校に附属産婆教習所が設置されてから135年あまりの歴史を有します。元来、助産師は、女性と子どもの「産む力」「生まれてくる力」を信じ、医学的知識をもとに、女性の妊娠・出産、母乳育児や子育て期の支援を担う看護専門職です。

本学では、4年間の看護教育の選択科目として、助産師選択コースを開設しています。昨今、助産学選択を希望される学生さんの多くは、『助産師』になりたいと本学に入学され、大学4年間、仲間と共に熱心に学習に取り組んでいます。

『助産師』に対する社会から求められる役割期待は、少子化や産科・新生児医療技術の進歩等により、これまで先人たちが専門としてきた「妊娠・出産」への支援だけでなく、地域における母子保健活動、プレコンセプションケアなど多様となり、分娩施設以外での活躍も目覚ましくなりました。

私自身は、助産技術のエビデンス創生を研究活動に国内外の研究者と従事しています。学生さんと講義や実習を通じて、「助産師」の魅力の伝承とさらなる発展を続けていきたいと思っております。



大学院医学研究科 皮膚科学

福本 毅 Takeshi Fukumoto

略歴

横浜市立大学卒業後、神戸大学で皮膚科医として、皮膚外科領域とアレルギー領域を中心に研鑽を積む。米国ウイスター研究所での留学を経て、神戸大学皮膚科学・准教授と神戸大学高等学術研究院・卓越准教授を兼務。その後、2025年6月より現職。

座右の銘

仲間と共に

皮膚科学教室の第10代教授を拝命いたしました福本毅と申します。平素より皮膚科学教室をご支援いただき、心より感謝申し上げます。

1897年に開講された当教室は、長い歴史と伝統を有しています。先人が築かれた理念を大切に継承しつつ、皮膚を通じて患者さまの全人的ケアを担える皮膚科医の育成に尽力してまいります。教室員一人ひとりが、臨床においても研究においても、個性を發揮することができる、活気ある教室をつくることが目標です。

臨床では、伝統的に強みを有する皮膚外科領域とアレルギー領域を軸に、幅広く皮膚科全般にわたり京都府民の皆様に信頼される診療を提供します。研究では、臨床に還元できる、世界に伍する独創性の高い成果を、京都から発信していきます。産学公の連携を礎として、早期の社会実装につながる研究を推進していきます。「世界トップレベルの医学を地域へ」の心意気で臨床・研究に励みます。

臨床でも研究でも、一人で出来ることには限りがありますが、仲間となら可能性は無限大だと信じています。皮膚科学教室の素晴らしい仲間と共に、全力で取り組んでまいります。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



大学院医学研究科 医療レギュラトリーサイエンス学

中島 宣雅 Nobumasa Nakashima

略歴

東京薬科大学大学院卒業後、旧厚生省入省。世界保健機関(WHO)ジュネーブ本部および経済協力開発機構(OECD)パリ本部にて勤務。厚生労働省国際薬事規制室長、医薬品医療機器総合機構(PMDA)国際担当執行役員、内閣府健康医療戦略ディレクターなどを経て、2025年7月より現職。

座右の銘

誠心誠意

医薬品・医療機器・再生医療等製品は、言うまでもなく、医療の提供に不可欠な存在です。当教室では、「医療レギュラトリーサイエンス(規制科学)」の研究、すなわち、これらの製品に関する規制、非臨床・臨床試験および評価手法、実臨床における適正使用などに関わる研究を推進しています。

私はこれまで、厚生労働省およびPMDAの代表としてICH(医薬品規制調和国際会議)などの国際的なフォーラムにおいて長年中心的な役割を担ってきました。その経験を活かし、国際的なガイドラインの研究およびそれらの国内普及に特に力を注いでいます。

また、当教室は本学の臨床治験センターと密接に連携していることから、今後は臨床試験に関連する研究にも注力してまいります。さらに、臨床試験を含む医学・薬学研究の実施にあたっては、倫理や利益相反などの社会的な観点にも十分な配慮が必要とされており、それらに関する研究も併せて取り組んでいきます。

レギュラトリーサイエンス研究や臨床試験の推進には、学内外の先生方や患者の皆様との協力が不可欠です。今後とも皆様のご支援とご協力を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

ご寄附のお願い

ふるさと納税制度を活用した寄附

『世界トップレベルの医学を地域へ』を目指し、ふるさと納税制度を用いた寄附金を募集しています。寄附金は、教育・研究環境の整備や国際交流事業、診療環境の充実等に活用させていただきます。



EICU(救急集中治療室)の整備



救急車の購入

学生のクラブ活動施設の整備
(テニスコートの芝の貼替、ヨット部の救急用ボートの購入等)

○ご寄附の方法：クレジットカード、ゆうちょ銀行、郵便局からの払い込み及び銀行等からのお振込

一般寄附

本学では、広く教育・研究、診療環境の整備等を推進するため、法人(企業等)や個人の方から寄附金を受け入れております。

○ご寄附の方法：お申込後、振込用紙によるお振込

創立150周年記念事業への寄附

2022年、本学は150周年を迎えました。150周年の節目を越えて、シミュレーションやVRを活用した次世代トレーニングセンター(仮称)の整備について、引き続き大学を挙げて取り組んでおります。

○ご寄附の方法：お申込後、指定口座にお振込

【お問い合わせ】

〒602-8566

京都市上京区河原町通広小路ル梶井町465番地 京都府立医科大学 事務局 総務課 総務係

TEL：075-251-5210 ホームページ：<https://www.kpu-m.ac.jp/doc/about/kihukin.html>



多くの皆様のご寄附を
お待ちしております。



「ドナルド・マクドナルド・ハウス 京都 (京都ハウス)」

開設資金寄附募集 目標額達成のご報告

病気と向き合う子どもとそのご家族のための滞在施設「ドナルド・マクドナルド・ハウス 京都(略称：京都ハウス)」の開設に必要な費用(建設費等)を調達するため、ドナルド・マクドナルド・ハウス 京都開設募金委員会と公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパンで、各4億円(計8億円)を目標に、企業・団体や個人の皆様からのご寄附を募集してまいりました。

あたたかいご支援の輪が全国に広がった結果、寄附目標額を達成し、開設資金8億円を確保することができました。関係病院や企業、団体をはじめ、全国からたいへん多くのご支援をいただき、誠にありがとうございました。

「第二の我が家」として安心して過ごすことのできる京都ハウスの開設に向けて、全力で取り組んでまいりますので、引き続き、ご支援及びご協力をたまりませんようよろしくお願いいたします。

ドナルド・マクドナルド・ハウス 京都開設募金委員会

〒602-8566京都市上京区河原町通広小路ル梶井町465番地(京都府立医科大学内) 公益財団法人京都府医学振興会
(TEL：075-212-5466 E-mail:kyoto-h@koto.kpu-m.ac.jp ホームページ：<https://kyoto-house.jp/>)

大学広報誌編集会議 京都府立医科大学大学院医学研究科 教授 天谷 文昌/教授 樽野 陽幸/講師 金子 美子
同大学院保健看護学研究科 教授 毛利 貴子/同大学 事務局 企画課 企画広報係 増田 百合

発行・お問い合わせ 京都府立大学法人 京都府立医科大学 事務局 企画課

〒602-8566 京都市上京区河原町通広小路ル梶井町465番地 TEL：075-251-5804 E-mail：kouhou@koto.kpu-m.ac.jp
ホームページ：<https://www.kpu-m.ac.jp> (右の二次元コードからもアクセス可)

